TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

BAOA QU

トイブックコレクションシリーズ　ガンダムオペレーション　ア・バオア・クー

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0001

戦術・戦略編

TB TOYBOOK

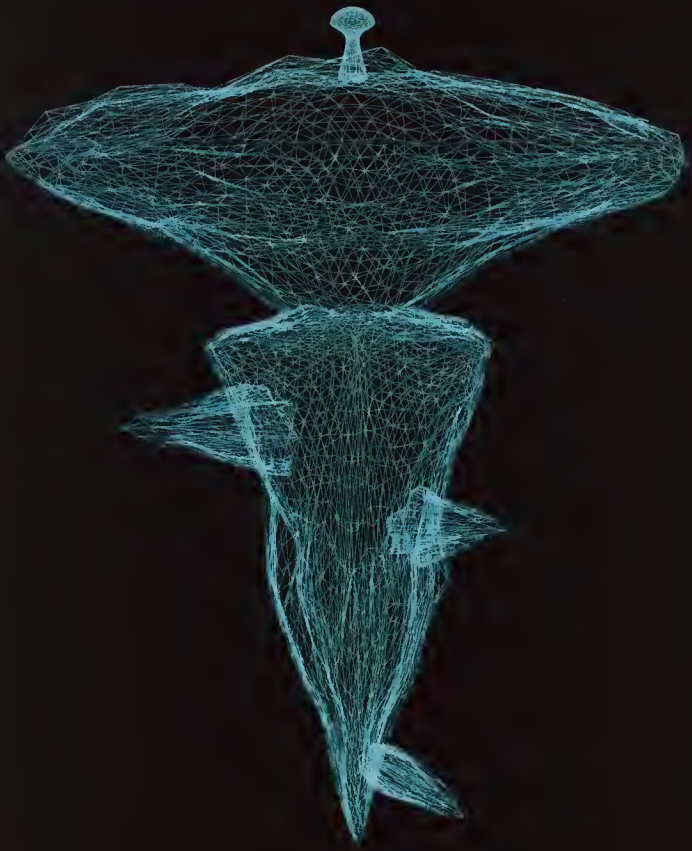
宇宙要塞ア・バオア・クーとは
about A BAOA QU

右に見えるのが、宇宙要塞ア・バオア・クーである。本来は資源採掘のために、小惑星帯から運んだ巨大な岩塊で、対空火器、司令室を設置し、宇宙要塞として改造したものだ。月の上空に浮かび、ジオン軍の本拠地、サイド3を直接防衛する役割を担っていた。

一年戦争末期、ジオン公国軍はア・バオア・クーを攻略されれば、あとはサイド3を残すのみという状況になり、まさに最終防衛拠点となった。地球連邦軍、ジオン公国軍ともに疲弊した戦力をすべて投入し、一年戦争の中でもかつてないほどの激しい戦闘が行われた場所である ――。

本シリーズでは、このア・バオア・クーでの戦いに焦点を当て、さまざまな角度から振り返り、かの一年戦争におけるこの戦いの意味を問いたいと思う。

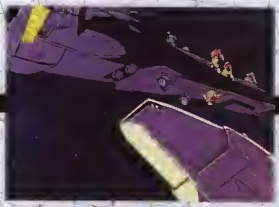
まず第1巻では、地球連邦軍、ジオン公国軍、それぞれの戦略・戦術を検証してみよう。

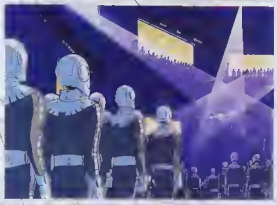


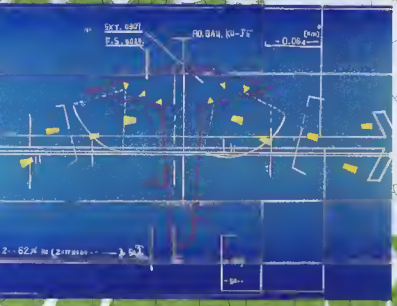
この極めて特異な形状は、円盤状と鉢上の小惑星を結合した結果である。内部に多数の資源と巨大な兵器プラントを有し、MS-14ゲルググはここで量産された。

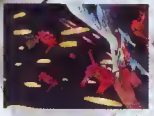
ア・バオア・クー戦線略

001









declaration of war

A BAOA QU outline

ア・バオア・クー戦開始

連邦軍最後の抗戦

ジオン公国軍の重要拠点、宇宙要塞ソロモンを攻略した地球連邦軍は、続いて「星一号作戦」を発動、ア・バオア・クーに進行しつつあった。しかし、ジオン軍のコロニーレーザーの発射により、全力攻撃の[illegible]が失われてしまう。衝撃を受けたのは、連邦軍の総司令官レビル将軍麾下の第1大艦隊であった。

しかし、連邦軍上層部はア・バオア・クー侵攻を進行する手を緩さなかった。そこでジオンに余計な時間を与えるのは得策ではないと判断したのだ。時間をかければ、再びコロニーレーザー発射の機会を与えてしまうためである。

連邦艦隊はサラミス級宇宙巡洋艦"ルナル[illegible]"を旗艦とし、軍[illegible]艦多数を編成。[illegible]"と呼ばれたホワイトベース隊は、"レビル[illegible]"を擁する第1大艦に組み込まれ、[illegible]艦隊の中核[illegible]ことになった。

一方ジオン軍は[illegible]が総帥ギレン[illegible]、兵士の[illegible]を鼓舞していた。

突撃艇による[illegible]

Nフィールド進行した第2、第3大艦隊により、連邦軍の第1波攻撃が開始された。まずは、突撃艇ガンペリクをア・バオア・クーに向け発進させる。ソロモン、[illegible]戦の際にも行われた手だが、ビーム攪乱幕を形成し、対空ビーム砲を使えなくする作戦であった。

ギレン・ザビ総帥はこれに冷静に対処する。モビルスーツ部隊を温存し、対空ミサイルで応戦。ソロモンでの経験を生かしア・バオア・クーにミサイル陣地を増設していたのである。そのビーム攪乱幕を形成するはずだった突撃艇ガンペリクは、十[illegible]撃破されていったのだった。

alteration

A BAOA QU outline

戦況の変化

ルザル艦隊戦闘開始

突撃艇パブリクによる作戦が失敗に終わった連邦軍艦隊は、前座の破壊を主眼とした攻撃と切り替え、モビルスーツ部隊を放出した。

数で押す連邦軍に、ジオン軍は戦闘空母ドロスを中核とした機動艦隊で応戦。ギレン・ザビ総帥は自軍の優勢を見て、これらを前進させる。

一方、Sフィールドでは、やや遅れて攻撃に加わったルザル艦隊が到着、戦闘を開始した。ここではキシリア・ザビ少将が指揮を執っており、ドロス級空母ドロワを中心としたモビルスーツ部隊で支えられていた。新たな敵戦力の出現にキシリア・ザビ少将は、シャア・アズナブル大尉に、第34モビルスーツ部隊とともにこれを殲滅するよう命令する。赤い彗星として知られるシャア・アズナブル大佐はMSN-02ジオングに搭乗し、この後、ホワイトベース隊のRX-78-2ガンダムと激しい戦いを繰り広げることとなる。

ギレン総統の死

ジオン軍優位に進んでいた戦局だが、ある事をきっかけに変化が起こった。ジオン軍司令官においてギレン・ザビ総帥がキシリア・ザビ将に殺害されたのである。その後、ア・バオア・クーの指揮権はキシリア・ザビ少将に移ることとなった。しかし、その指揮権の移行のせいで、指令系統が混乱することとなり、ジオン軍の防衛力の一時的な低下を招いてしまう。その隙をつき、連邦軍艦隊はNフィールドの主力艦隊を支えていたドロスを撃沈。続いて、ルザル艦隊がSフィールドのドロワを沈め、一気に優勢に転じることができた。

キシリア・ザビ少将はその戦況を再度好転させるべく、各フィールドにモビルスーツ隊を派遣したが、パイロットの多くが学徒兵だったこともあり、うまくは行かなかったようだ。

00
2

tug-of-war

A BAOA QU outline

最後の攻防戦

00
3

ア・バオア・クー上陸

[redacted]の[redacted]艦隊を撃破し、本隊に上陸[redacted]ア・バオア・クー[redacted]は[redacted]連邦軍が制することとなった。[redacted]そのものの攻略を残すのみである。

[redacted]ホワイトベース[redacted]連邦軍ルザル[redacted]

3分の1の戦力を失ってはいるが[redacted]ス隊のRX-78-2ガンダムが血路を[redacted]モビルスーツ隊は、[redacted]込んだドロワを盾[redacted]上陸に成功した。

続いて[redacted]にも連邦軍モビルスーツ隊が上陸。ア・バオア・クー表面上を防衛している[redacted]のモビルスーツ隊を撃破していく。ビーム砲撃やミサイル爆撃も次々に破壊していく。要塞内部へと侵攻していった。また、自軍不能になった連邦艦も、そのままア・バオア・クーに接舷。乗組員は[redacted]に続いて[redacted]を取り[redacted]へと出[redacted]った。

白兵戦

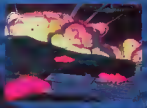
戦いの舞台は要塞内に移り[redacted]で激しい戦闘が行われた。連邦、ジオン[redacted]の兵々を破壊され[redacted]、生き残ったパイロット達はモビルスーツを捨て、白兵戦に[redacted]るものは銃を持ち、あるものはバズーカを持ち[redacted]を投じていった。こうなると、もう戦争というよりはただの戦いである。

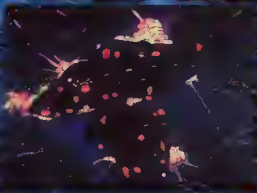
[redacted]ますます激しくなってきたジオン軍の多くの兵士達は、戦意を失っていった。中には戦闘を離脱する者も少なくなかったという。キシリア・ザビ少将も本国との連絡ラインの戦いをあきらめ[redacted]艦隊の脱出を見届けた後、ア・バオア・クー防衛を決意、最後の準備を始めていた。

conclusion

A BAOA QU outline

そして終結——





ア・バオア・クー陥落

ザンジバル級機動巡洋艦で脱出をはかろうとしたキシリア・ザビ少将であったが、護衛もない単艦での脱出は容易ではなかった。発進してすぐに、マゼラン級宇宙戦艦のビーム砲の直撃を受け、爆発、撃沈してしまう。これによりキシリア・ザビ少将は戦死し、ア・バオア・クーは事実上陥落した。

要塞内部では戦闘による破壊で、激しい爆発が起こり始めていた。大規模な火災が発生し、破壊された戦艦、モビルスーツ、そして逃げ遅れた兵士達が炎に焼かれていく……。昼戦を戦い抜いてきた連邦軍強襲揚陸艦ホワイトベースも爆発に巻き込まれ、その最後の時を迎えることとなった。

こうして一年戦争最大の攻防戦は幕を閉じた。

多くの兵力と指導者を失ったジオンにはすでに反抗を続ける力はなく、翌日の0080年1月1日終戦協定が結ばれることとなる——。

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

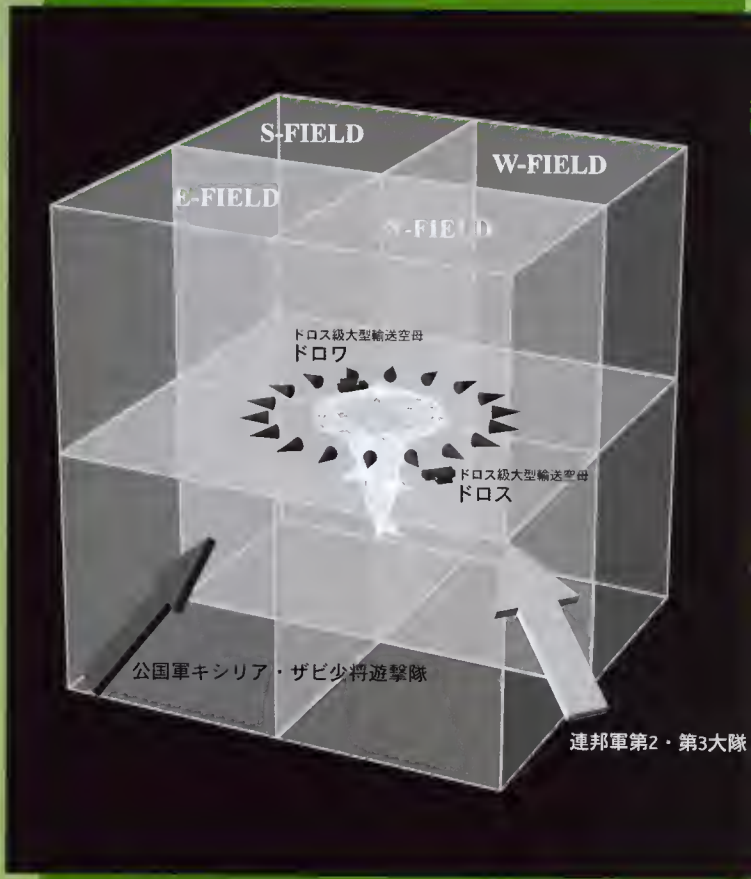
A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0001

戦術・戦略編

ア・バオア・クー戦闘の推移



第1次戦闘段階

”一年戦争最大の激戦“の幕開け

「星一号作戦」発令

宇宙要塞ソロモンの攻略によって、地球連邦軍はジオン公国本土・サイド3侵攻の足かかりを築いた。U.C.0079年12月29日。地球連邦軍はア・バオア・クー攻略作戦「星一号作戦」を発令。作戦の総指揮官レビル将軍率いる艦隊戦力を、順次コンペイトウ(旧ソロモン)より出港させた。同要塞を出港した連邦軍艦隊は、公国のあるL(ラクランジュ)2方面に向けて3方向から進軍し、ア・バオア・クーに対するライン上に集結　ここでレビル将軍はこの作戦の攻撃目標"星"を明らかにする　「ア・バオア・クーを抜き、公国へ進攻する」。

これに対して、ギレン・ザビ総帥が指揮するジオン公国軍は、地球連邦軍の目標がア・バオア・クーであると判断。12月30日21時05分、ソーラ・レイ・システムを連邦主力艦隊に向けて発射した。この攻撃によって、レビル将軍麾下の第1大隊をはじめとする艦隊の3分の1が消滅(なお、この時にレビル将軍は戦死している)。わずかに残った艦艇はサラミス級巡洋艦"ルザル"を旗艦として艦隊を再編することとなった

連邦艦隊再編からア・バオア・クー宙域侵攻へ

戦力の多くを失った連邦軍であったが、翌31日00時00分、「星一号作戦」の継続を強行する。これを受けた連邦軍残存艦隊は、その決定から約5時間を経て全艦隊の再編を完了。ルザルを中心とする第1大隊はキシリア・ザビ少将麾下の遊撃隊との交戦によって合流が遅れていた第13独立部隊を編入し、Sフィールドからア・バオア・クーの管制空域に進攻。ソーラ・レイ・システムの直撃を受けずに済んだ第2大隊および第3大隊はNフィールドよりア・バオア・クー空域に進攻を開始した。

一方のジオン公国軍は、各フィールドに配置されたア・バオア・クーの防衛艦隊に、クラナダから出撃しEフィールドに到着したキシリア・ザビ少将麾下の遊撃隊を加えた軍容で連邦軍を迎え撃つことになった。のちに一年戦争最大の激戦と評される「ア・バオア・クー攻防戦」の幕開けであった。

第2次戦闘段階

Nフィールド迎撃戦

第1次攻撃隊の編成

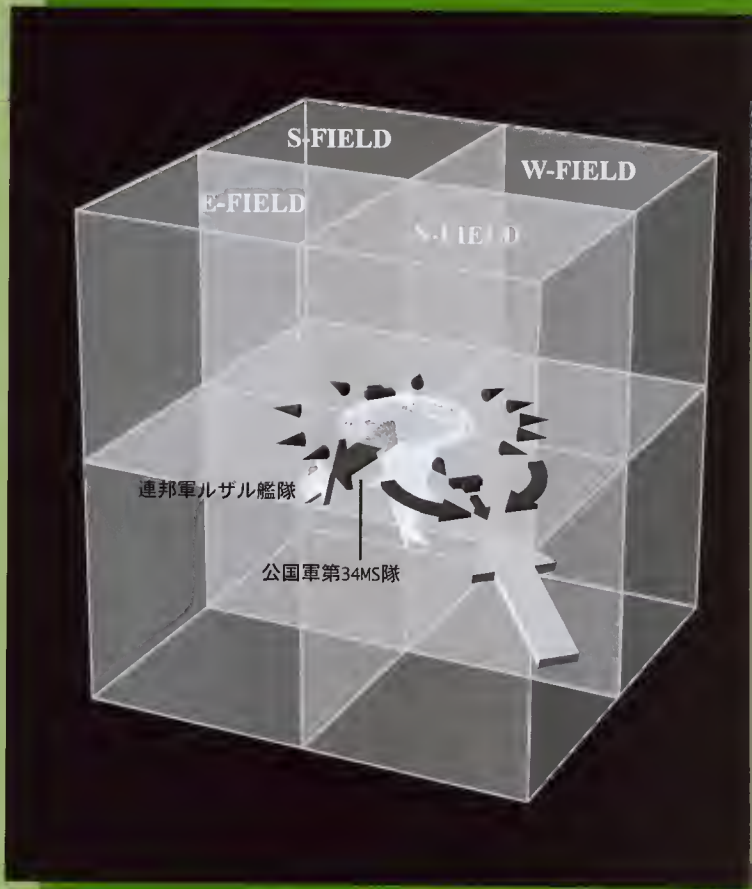
31日06時10分、鏃一文字陣形を取ってア・バオア・クーのNフィールドに侵入した連邦軍艦隊第2大隊、第3大隊は、バブリク突撃艇、宇宙戦闘機隊、揚陸艇からなる第1次攻撃隊を発進させる。これは、前方宙域にビーム撹乱膜を形成してア・バオア・クーおよびジオン艦艇からのビーム砲火を阻害しつつ、艦隊を前進させようとするものであった。ソロモン攻略戦で大きな戦果を挙げた戦術を、この戦場でも実行に移したのである。

これに対してギレン・ザビ総帥は、対空ミサイルによる応戦を指示。ソロモン陥落の一因となったビーム撹乱膜の教訓に習って急遽増設されていたミサイル砲座からの対空砲火によって、連邦軍第1次攻撃隊の形成したビーム撹乱膜はその意味を失う。加えて、防衛艦隊から発進したガトル戦闘爆撃機の大編隊による迎撃によって、連邦軍の第1波攻撃は失敗に終わることとなる。一方、Eフィールドからア・バオア・クー管制空域に進入したキシリア・ザビ少将麾下の逆撃隊は、戦端が開かれたNフィールドへと回されていた。同じく、Sフィールドの防衛艦隊の半数も、交戦の只中にあったNフィールドへと移動を開始していた。

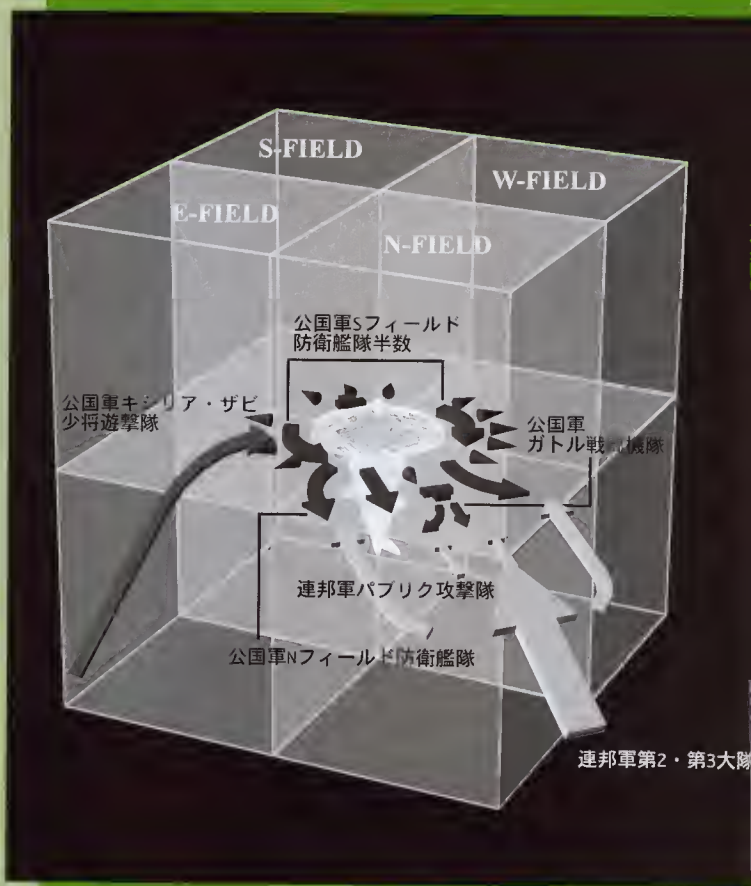
鉄壁のア・バオア・クー防衛網

ア・バオア・クーからのミサイル攻撃は、連邦軍にとって当初の想定を超えた規模であった。ア・バオア・クーへ接近するためにミサイル砲座の沈黙を余儀なくされた連邦軍は、08時40分、モビルスーツ（以下MS）部隊を発進させる。ビーム撹乱膜を利用した艦隊前進を中断し、ミサイル砲台の破壊を目的とした攻撃に転じたのである。しかしながら、この攻撃に当たるMS部隊はア・バオア・クーの対空防衛システムによる十字砲火に晒されることになる。その優位性を念頭に置いたギレン・ザビ総帥は、迎撃に投入するMS部隊を最小限に抑え、対空砲火によって連邦軍MS部隊の前進を阻むよう命令を下した。その思惑通り、連邦軍のMS部隊はクロスポイント（最大砲火集中部分）を突破することができず、攻防戦の序盤はジオン公国軍がMS部隊を温存する形で展開していった。

ア・バオア・クー戦闘の推移



ア・バオア・クー戦闘の推移



第3次戦闘段階

連邦軍の第2波攻撃

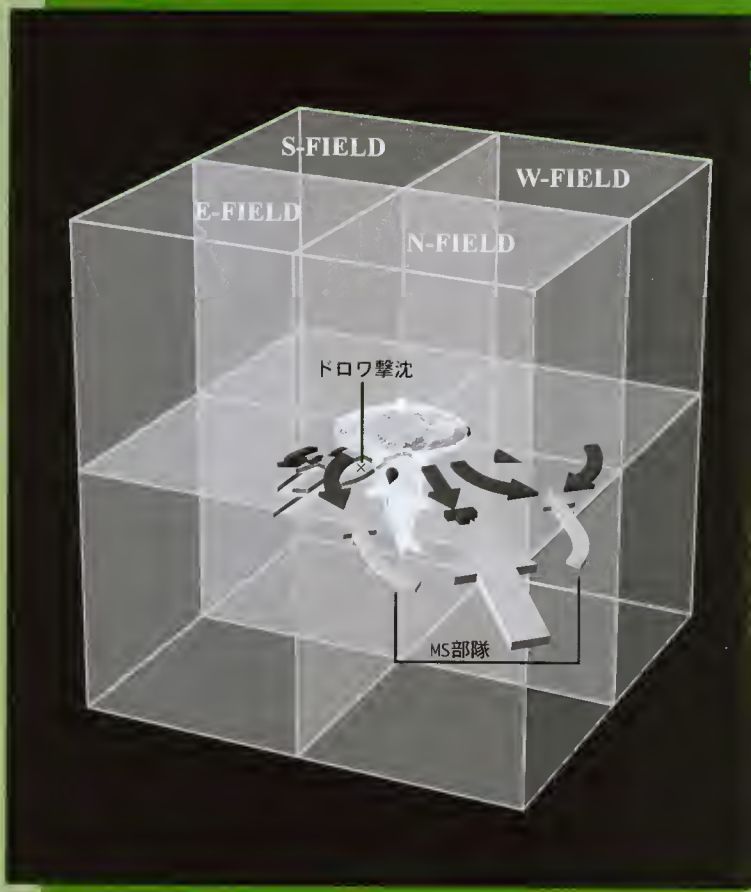
ジオン主力艦隊の攻勢

Nフィールドの攻防をア・バオア・クー司令室で観察していたギレン・ザビ総帥は、「圧倒的ではないか、我が軍は」と洩らしたという。事実、その言葉通りに、連邦軍第2、第3大隊はア・バオア・クーの対空防衛システムによる十字砲火と迎撃に囲ったMS部隊に進路を阻まれ、ジオン公国軍の優勢で戦況は進んでいた。その状況を鑑みたギレン・ザビ総帥は、ドロス級大型輸送空母のT番艦"ドロス"を中心としたジオン公国軍主力艦隊に前進を指示。Nフィールドに侵入した連邦軍艦隊の押し返しを図った。しかし、これとほぼ同時刻の09時00分頃（正確な時刻は定かではない）、密集陣形を取った連邦軍ルサル艦隊の艦艇25隻がSフィールドの管制空域に侵入する。

Sフィールドの攻防

このときSフィールド防衛の陣頭指揮に当たっていたのは、麾下の遊撃隊をNフィールド防衛に回し、自身はア・バオア・クー内部に移動していたキシリア・ザビ少将であった。少将は、ドロス級大型輸送空母2番艦"ドロワ"を中心とするSフィールド防衛艦隊から302哨戒中隊をはじめとする迎撃部隊を発進させ、ルザル艦隊の迎撃に当たらせた。この交戦でシャア・アズナブル大佐率いる第34MS隊は、旗艦"ルザル"を撃沈するなど、大きな戦果を挙げる。このときのシャア・アズナブル大佐の獅子奮迅の働きについて、ホワイトベース隊のMSパイロット、アムロ・レイ（ニュータイプとして知られる彼の名をご存知の方は多いだろう）は、「シャア以上のニュータイプみたいだ」と驚嘆の声を上げたと伝えられている。一方のNフィールドでも、徐々にではあるがジオン公国軍主力艦隊が連邦軍艦隊を押し込みつつあった。ルザル艦隊の登場によって変化を見せるかと思われた戦況であったが、キシリア・ザビ少将の防戦指揮とア・バオア・クーの厚い対空砲火によって、ジオン公国軍優勢の状況は揺るいでいなかったのである。

ア・バオア・クー戦闘の推移



第4次戦闘段階

劇的な戦況の変化

ギレン・ザビ総帥暗殺

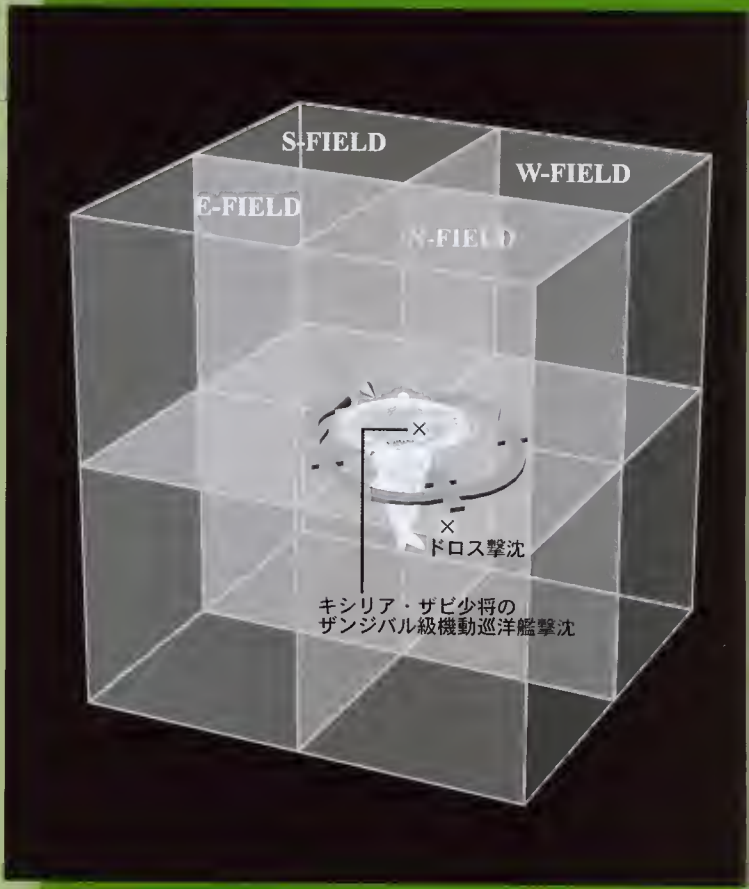
ジオン公国軍優勢で戦況が進む中、ア・バオア・クー司令室でひとつの事件が起こる。キシリア・ザビ少将によるギレン・ザビ総帥の暗殺である。さまざまな要因が重なった上での行為であったが、ここではその原因について割愛することとする。結果として、この時点でジオン公国軍の最高指揮権はキシリア・ザビ少将に移行し、以後のア・バオア・クー攻防戦の全権は少将に委ねられることとなった。09時25分のことである。「ギレン・ザビ総帥戦死」の報は瞬座に前線に伝えられ、防衛に当たっていた全軍に動揺が走った。Sフィールド防衛の任に当たっていたエギーユ・デラーズ大佐をはじめとする親ギレン派の将校は戦力の温存を図り、それが転じて連邦軍に対する攻撃の手を緩めることとなる。

連邦軍のア・バオア・クー上陸

こうして、ギレン・ザビ総帥暗殺からキシリア・ザビ少将への指揮権移行というわずかな空白の時間に、戦況は一変した。09時40分、Nフィールドを支えていたジオン公国軍主力艦隊の"ドロス"が撃沈され、その間隙を縫った連邦軍第2、第3大隊が左右にMS部隊を展開して再び前進を開始。一方のSフィールドでは、連邦軍ルザル艦隊が艦艇の半数に近い10隻の艦艇を失いつつも、ホワイトベース隊のRX-78-2が中央突破を敢行し、残存艦艇とMS部隊をクロスポイント通過に導いていた。この突破劇の中で、Sフィールド防衛の要であった"ドロワ"は10時10分に撃沈されている。

こうした状況の激変にキシリア・ザビ少将は、Nフィールドの連邦軍艦隊に対してMS-14を中心とするMS部隊を投入し、Sフィールドからア・バオア・クーに上陸しつつある連邦軍ルザル艦隊にはシャア・アズナブル大佐をはじめとするMS部隊を差し向け、各個に迎撃させようとしたのである。しかしながら、ルザル艦隊のMS部隊は"ドロワ"の残敵を盾にする形で続々とア・バオア・クーに上陸。戦況は完全に逆転したのである。

ア・バオア・クー戦闘の推移



5 第5次戦闘段階 激戦の終焉

キシリア・ザビ少将の油断と誤算

Sフィールドの連邦軍ルザル艦隊がア・バオア・クー上陸に成功し、戦闘が要塞内部での白兵戦に移行しつつあった頃、Nフィールドでも連邦軍の攻勢が強まっていた。その最大の要因として、迎撃に回ったMS部隊の働きが芳しくなかったことが挙げられる。MS-14という、当時では最高レベルの性能を誇るMSが配備されながらも、それを運用するパイロットのほとんどが学徒動員兵であったために、性能を十分に発揮することが適わなかったのである。劣勢に立たされたキシリア・ザビ少将は、連邦軍をア・バオア・クー内部に誘い込んだ上で殲滅する戦術を採った。Sフィールドでは連邦部隊の上陸を許し、Nフィールドにおいても連邦軍艦隊の前進を阻止できずにいた状況では、その決断はやむを得ないものであったともいえる。しかし、本国およびグラナダに戦力が残されていたとはいえ、援軍の目処も立たないこの攻防戦においては、そうした消極的戦術を採ることは自殺行為であった。この時点で、戦況は急速に連邦軍の優勢に傾いていくのである。

ア・バオア・クー陥落

SフィールドとNフィールドの双方からア・バオア・クーに上陸した連邦軍は、第2、第3大隊の残存艦艇とMS部隊を要塞周辺に展開し、制宙権を完全に掌握していた。一方、要塞内部への連邦軍部隊の侵入を許したジオン公国軍には指揮系統の乱れも生じ、その敗色は次第に濃厚となっていく。ここに至り、キシリア・ザビ少将はア・バオア・クーからの脱出を決断。この要衝を放棄し、本国とグラナダに残された戦力で戦局の立て直しを図ろうした。しかしながら、少将を乗せたザンジバル級機動巡洋艦はNフィールドのゲートから出港した直後に連邦艦艇からの砲撃を受け、12時05分に撃沈。キシリア・ザビ少将は戦死し(今日では、キシリア・ザビ少将はシャア・アズナブル大佐によって暗殺されたとする説が有力となっている)、実質的にア・バオア・クーは陥落した。さらに、キシリア・ザビ少将の戦死から10分後の12時15分、要塞中央部のミサイル工場で火災が発生し、その直下にあった電力供給システムが停止。ア・バオア・クーは完全に沈黙することとなる

こうして、ア・バオア・クー攻防戦は終結した。そのおよそ6時間後の18時00分、ジオン共和国(ザビ家の支配体制が崩れたことにより、公国内閣と議会が共和政体へ移行)はサイド6を通して地球連邦政府に終戦協定締結を申し出た。翌U.C.0080年1月1日、地球連邦政府とジオン共和国との間に終戦協定が結ばれ、一年戦争は終わりを告げたのである。

Military power and strategy of E.F.S.F.

地球連邦軍の組織編成

Organization of E.F.S.F.

設立から開戦に至るまで

地球連邦軍の設立は、宇宙世紀以前にまでさかのぼる。当時表面化していたさまざまな問題――地球環境の汚染、人口爆発によるエネルギー、食料危機等を解決するために、従来のような国際的調停機関以上の権限を持った機関が必要とされた。そこで、全地球的規模の行政機構である地球連邦政府が成立することになる。地球連邦軍は連邦政府がその主権を行使するために不可欠なものとして、同時に設立されることとなったのである。

その目的は地球全体の恒久的平和を維持することであった。軍は政府の大きさに比例し、人類史上最大と言われ、統制は地球圏全体に及んでいた。連邦軍は連邦政府の利益を最優先とするよう定められたため、文民統制を前提とし、最高司令官は地球連邦首相とされた。

設軍当初は地域紛争の解決や、災害時の緊急出動など、旧世紀の国連軍とほぼ同じような役割を担っていた。そのため、その装備も人員も多くは国連軍からそのまま引き継いでいたようである。

宇宙世紀に入ると地域紛争が少なくなり、軍備は縮小する傾向にあった。コロニーへの宇宙移民がスムーズに行われたのは、軍備にかける予算を宇宙開発に使えたからだとも言われている。宇宙移民が軌道に乗り連邦の勢力範囲が宇宙にまで及んだが、宇宙軍は創設されていなかった。当時のコロニーに警察以上の治安維持装置は必要とされなかったためである。

本格的に宇宙軍の必要性が感じられるようになったのは、宇宙移民者の自治権要求運動が活性化しはじめた40年代だと言われている。宇宙移民者たちの間で反連邦運動が高まりつつあり、その牽制行為が必要であったからである。

こうした経緯で連邦政府は50年代に宇宙軍を設立する。人類史上、宇宙軍と呼ばれるものが存在したことがなかったため、その構成や人材選抜で連邦軍上層部の頭を悩ませた。そこで、宇宙を海に見立て、海軍の組織を模倣することが考えられた。宇宙軍の用語に船舶関係のものが多く見られるのはこのためである。また、人材面に関しても海軍から抜擢された人間が最も多かったようだ。

こうして新たな軍組織は宇宙軍と地球軍という2つの柱によって成立することとなった。その後ジオン公国という仮想敵が宇宙に存在することとなった地球連邦軍は、開戦までの20年間、宇宙軍の増強を繰り返し、一年戦争を迎えることとなる。

連邦軍の基本構成

最高司令官は前述の通り、地球連邦首相である。連邦軍の出動は首相が連邦安全保障会議へ命令することにより行われ、この命令には連邦議会の承認が必要である。また、有事の際に、首相が連邦軍への出動命令を出さなかった場合、議会決議によって首相に対して出動要請を行うことが定められている。首相から出動命令を受けた連邦安全保障会議は、連邦軍参謀本部へこれを伝達、そこから各軍へ命令が発せられる。参謀本部は、最高幕僚会議と軍事会議によって構成されており、作戦立案の際には中央情報局からの情報が用いられる。

軍組織は宇宙軍省と地球軍省で構成され、参謀本部に統轄されている。

宇宙軍省は一年戦争開戦まで増強されていき、70年代の軍備増強計画において就役したサラミス級宇宙巡洋艦とマゼラン型宇宙戦艦が主力艦となった。一年戦争当時は、各コロニーと月面都市、軍事基地ルナツーへの駐留軍と、独立機動軍で構成されていた。一般に連邦宇宙軍連合艦隊と呼ばれるのは独立機動軍に属する艦艇を編成したもので、常時存在しているわけではなかった。

地球軍省は宇宙軍省と同時に創設された、陸海空軍を統轄するところである。一年戦争開戦前まで、軍備増強計画はもっぱら宇宙軍にあてられていたため、対侵略戦において決して満足いくような力は持っていなかった。地球軍省に属する各方面軍の代表的なものとして「極東方面軍」「欧州方面軍」「北米方面軍」などがある。

基本的には以上のような構成だが、一年戦争緒戦で大きな被害を受けた連邦軍の内情は厳しく、系統を無視した指揮が行われることもあった。代表的な例で言えば、宇宙軍省に属するレビル将軍が、地球軍省の作戦であるはずのオデッサ作戦の指揮を執ったことなどが挙げられる。このように一時混乱した指揮系統は、一年戦争末期には開戦時の状態まで修復されたようである。

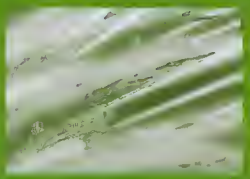
ア・バオア・クー戦時における連邦軍の編成

概　要

一年戦争終戦におけるア・バオア・クー攻防戦やルウム戦役で地球連邦軍はジオン公国軍に大敗を喫することとなった。それは、連邦軍にとって初めての宇宙空間での本格的な戦闘であり、組織だった戦闘ができなかったことと、ジオンの新兵器、モビルスーツに対しての対処法を持っていなかったことが理由として挙げられる。

このような状況で、連邦軍に宇宙艦隊その他軍備のさらなる強化、再編かせまられた。その際発動されたのが、宇宙艦隊の再建計画「ビンソン計画」である。ジャブローの工場で多くの艦艇の改良、量産を開始し、最終的にはジオン本拠地であるサイド3への侵攻を目標としていた。

0079年12月「ビンソン計画」に基づき量産されていた宇宙艦隊はジャブローを発進し、第一目標であるソロモンの攻略を開始した。ソロモンを攻略した直後の連邦軍艦隊の被害は宇宙戦力の約20％であったと言われている。その後、ジオンのソーラ・レイの攻撃があり、さらに主力艦隊第1大隊の30％を失ってしまう。ア・バオア・クーへの即時進攻を決定した連邦軍は第1大隊を再編し、ほぼ無傷であった第2、第3大隊とともに、ア・バオア・クーを挟み撃ちする形で攻撃することになったのである。



第１大隊

もとはレビル将軍が搭乗していたマゼラン級宇宙戦艦フェーベを旗艦とする連邦軍の主力艦隊であった。しかし、ソーラ・レイの攻撃によりフェーベを失い、その後はサラミス級宇宙巡洋艦ルザルが旗艦となった。ア・バオア・クー攻撃に参加した第1大隊の残存艦艇は25隻と言われ、その中には第13独立部隊ホワイトベース隊も編入されていた。Nフィールドでの攻防戦の裏をかき、Sフィールドから不意をついた形で攻め込むという作戦かとられたため、第2、第3大隊よりも少し時間をずらして戦闘に参加した。ニュータイプ部隊と噂されたホワイトベース隊はSフィールドの攻略において、大きな功績を上げたと言われている。

第２、第３大隊

第1大隊とは違い、ソーラ・レイによる被害を受けておらず、100隻近い艦艇で編成されていた。そのため、主力艦隊としてNフィールドからア・バオア・クーへと進攻することとなった　第1波攻撃として突撃艇パブリクにより、ビーム撹乱幕を展開し、ビーム兵器を使用できなくするという、ソロモン攻略時と同じ作戦をとったか、ジオン公国軍の対空ミサイルにより失敗に終わっている。トロス級空母の迎撃を受け、なかなかア・バオア・クー表面にはたどり着けなかったが、モビルスーツ隊の働きによりこれを撃沈させている。

地球連邦軍投入戦力

VESSELS

艦船

戦艦マゼランタイプ　十数隻

巡洋艦サラミスタイプ　100隻弱

強襲揚陸艦ホワイトベースタイプ　数隻

突撃艇パブリク　多数

戦闘攻撃機コア・ブースター　1機

SPACE FIGHTERS

宇宙戦闘機

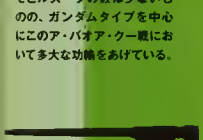
MOBILE SUITES
モビルスーツ

ア・バオア・クー攻略時の連邦軍の戦力は一説によると、戦艦18隻、巡洋艦98隻、突撃艇110機、輸送艦84機、モビルスーツ4800機、宇宙戦闘機900機と言われている。だが、正確な数字は確認されていない。

主戦力はジム、ボールの量産モビルスーツ部隊であった。もともと、星一号作戦が主力モビルスーツの大量投入によって、ジオン公国側の機動兵器における優位性を消し去り、圧倒的な物量で攻め勝つ作戦であったためである。しかし、ソーラ・レイの照射により、艦隊の戦力の3分の1が失われたため、当初期待されたほどのものとはならなかったようだ。

それに代わって、ホワイトベース級強襲揚陸艦の部隊は、モビルスーツの数は少ないものの、ガンダムタイプを中心にこのア・バオア・クー戦において多大な功績をあげている。

ガンキャノン　数機



ボール　多数

ジム　多数

ガンダムタイプ　数機

■■■■■連邦軍戦力諸説 ■

星一号作戦に投入された戦力にはまだまだ不明確な部分が多い。

特にホワイトベースへ配備された戦力に関しては、諸説入り乱れている。コア・ファイターではなく、ガンダムの強化パーツであるGファイターが使われたという説や、RX-75ガンタンクが配備された説などがある。

また、ホワイトベースに配備されたガンダム以外に、ガンダム4号機、5号機がホワイトベース級準同型艦サラブレットに配備され、星一号作戦に参加したという話もある。

column

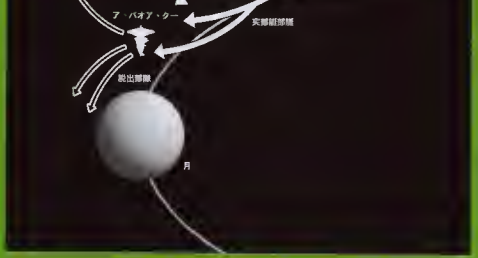
地球連邦軍の戦略

ソロモン攻略後の連邦軍艦隊の動向

地球連邦軍がソロモン(以降コンペイトウ)を攻略した背景には、きたるべきジオン公国本土への攻撃を視野に入れた中継基地の確保という目的もあったとされる。コンペイトウを拠点とすることで、サイド3、グラナダ、ア・バオア・クーというジオン公国の重要拠点すべてに手が届くことになる。地球連邦軍首脳部はその選択肢の中から、ア・バオア・クー侵攻というステップを経てジオン公国本土への攻撃という戦略を採った。これが「星一号作戦」と呼称される作戦行動である。この作戦の総司令に予定されていたレビル大将は、作戦発令の3日前にあたる12月26日、麾下の第1連合艦隊を率いてコンペイトウに到着。作戦発令当日の29日に同要塞を出港した。ただし、作戦に参加する全艦艇の整備・編成には予想以上の時間を要し、準備が完了した艦艇から順次コンペイトウを出港する形とならざるを得なかった。また、順次出港した艦艇が分散して合流地点を目指した背景には、ア・バオア・クーを目標とした作戦の意図を隠匿する狙いがあった。かくして、「星一号作戦」の準備は静かに進められていったのである。

「星一号作戦」に隠された戦術意図

「星一号作戦」の作戦実行時にレビル大将が口にした「ア・バオア・クーを抜き、公国へ進攻する」という言葉、そこには、月(グラナダ)とア・バオア・クー、公国本土の位置関係という戦略的意図が介在している。ア・バオア・クー攻防戦前の作戦予定では、合流ポイントに集結した連邦軍艦隊は、艦隊の再編を行いつつ同ポイントで3日間待機することになっていた。予定通り事が進めば、ア・バオア・クーは周回軌道と周期の関係上、月との最接近点に位置し、一方の公国本土は月から最も離れた場所に位置することになっていた。その時点であれば、激しい抵抗が予想されるグラナダとア・バオア・クーを避けて公国本土の喉元に攻め入ることが可能だった。つまり、「ア・バオア・クーを抜き」という表現は、ア・バオア・クーを攻略してという意味ではなく、そのステップを省略してという意味が含まれていたのである。しかしながら、その連邦軍の目論みは、デギン・ザビ公王の和平交渉というイレギュラーな事態によって外れることになる。

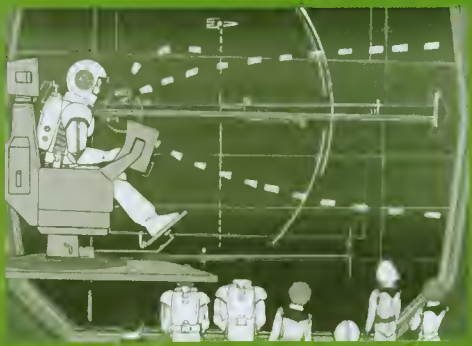


机上の作戦と現実の違い

デギン・ザビ公王が乗艦する"グレート・デギン"とレビル将軍の旗艦"フェーベ"の接触は、連邦軍にとっては不運な結果を招くこととなった。ジオン公国軍のソーラ・レイ・システムの照準が、ザビ家内部の対立に根ざしたギレン・ザビ総帥の謀略によって、奇しくも最高指揮官とその精鋭艦隊に向けられたためである。この攻撃によって艦隊戦力の3分の1を失った連邦軍は、ジオン公国軍に対する物量の優位性を失った。さらに、屈指の戦術家であったレビル将軍を失ったことで、ア・バオア・クー攻防戦で想定外の苦戦を強いられることとなったのである。逆説的に語るのであれば、ジオン公国軍内部でキシリア・ザビ少将によるギレン・ザビ総帥の暗殺が実行されなければ、ア・バオア・クー攻防戦で連邦軍が勝利を収めることは難しかったかもしれない。いずれにせよ、不測の事態によってア・バオア・クー攻防戦の趨勢が大きく左右していたことは確かであろう。

ア・バオア・クー攻防戦後の動き

本来の「星一号作戦」は、ア・バオア・クーとグラナダをやり過ごして公国本土に侵攻することが作戦の概要であった。しかし、結果としてア・バオア・クー攻防戦は行われ、そのさなかにザビ家一門がことごとく戦死したことによって(唯一生き残ったドズル・ザビ中将の娘ミネバ・ザビはアクシズへと落ち延び、のちに禍根を残すこととなる)、戦局は当初の予定とは異なる形で終幕を迎えた。地球連邦政府は共和制へと移行したジオン共和国の講和申し入れを受諾。そののちにジオン共和国に傀儡政権を発足させることでジオン公国の反抗の芽を摘み取った(と考えた)のである。しかし、この政策は以降にジオン残党の跳梁を許す要因を生むこととなる。地球連邦政府の場当たり的な姿勢が、一年戦争終結後もなお戦乱の火種を残したのだといえよう。



Military power and strategy of Principality of Zeon force

ジオン公国軍の組織編成

Organization of Principality of Zeon force

設立から開戦に至るまで

ジオン公国軍は0058年にサイド3がジオン共和国として独立宣言を行った際発足した「国防隊」を基としている。

「ジオン」とは、思想家であり、革命家であったジオン・ダイクンの名に由来する。彼は宇宙という新たな環境が人類に革新をもたらすというニュータイプの概念を提唱した人物である。サイド国家主義（コントリズム）に基づき、地球から宇宙を支配するという連邦政府の在り方を誤りとし、サイド国家主義によるスペースノイドの自治権獲得を訴えた。ジオン共和国は彼を初代首相として成立し、同時に設立された国防隊はサイド3に駐屯していた連邦軍部隊の切り崩しを行っていたと言われている。その後、国防隊は0062年に国軍へと昇格した。

0068年、ジオン・ダイクンの急死により、デギン・ザビが第2代首相に就任。翌0069年に「公国宣言」を行いジオン共和国は「ジオン公国」と国号を変えた。これにより従来の共和制に対立する、ザビ家の独裁政権の道を開くこととなった。「ジオン公国」となったサイド3は独立国家としての存続を保つため、いっそうの軍備拡張を行うこととなった。これは、国防隊のように連邦に対する抑止的軍事力ではなく、明確に戦争を意識した軍を作る政策であった。これはザビ家一門の支配のもと、挙国一致で行われたと言われている。

0079年1月3日、ジオン公国は連邦政府に対して独立を宣言し、宣戦布告を行った。ジオン公国はこのときすでに実質的には独立国家であったが、連邦政府はそれを認めていなかったのである。しかし、戦争目的は単に独立の承認だけには留まらなかった。連邦政府に対等な国家として認知されるという共和国時代の理念は、デギン・ザビによって変質し、その息子ギレン・ザビにおいて、連邦政府の打倒という目的に変容を遂げていた。

開戦に踏み切れたのは、なんといってもモビルスーツの存在が大きい。公国軍は早くからミノフスキー粒子散布技術によってもたらされる有視界戦闘下での戦術を重要視しており、新兵器の開発を急務としていたのである。結果、開発されたのがモビルスーツであり、実際にその効果は大きかった。一年戦争開戦時の一週間戦争、ルウム戦役において、5倍近い戦力を有していた地球連邦軍に対して勝利を収めることができたのはこの新兵器のおかげだったのである。

ジオン公国軍の基本構成

ジオン公国において軍機構は行政組織と密接に関わっており、「政軍一体」の形をとっていた。組織上、頂点には公王のデギン・ザビが立っていたが、名ばかりの公王であり、軍事、行政のすべては総帥のギレン・ザビによって掌握されていた。

軍組織は、宇宙攻撃軍、突撃機動軍、地球方面軍の3つに分かれ、それぞれをザビ家の兄弟が指揮していた。

宇宙攻撃軍と突撃機動軍は、開戦準備の最終段階において組織改造された際に生まれた。これは、宇宙艦艇を主力と考えるドズル・ザビ少将（当時）と、モビルスーツを主力と考えるキシリア・ザビ大佐（当時）の戦術論が対立した結果であった。両者は自説を曲げることがなかったため、ギレン・ザビ総帥が妥協案として提示したのがこの公国軍の2分化だったのである。

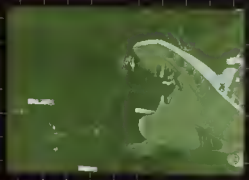
宇宙攻撃軍は、中将となったドズル・ザビが、突撃機動軍は少将となったキシリア・ザビが指揮を執ることになった。両者の大きな違いはモビルスーツ大隊の数であり、これはそのまま指揮官の戦術思想を表したものであろう。宇宙攻撃軍にはモビルスーツ大隊は1つだけで、かわりに宇宙戦艦が増やされていた。一方、突撃機動軍はモビルスーツ大隊数個を擁しており、新型のモビルスーツやモビルアーマーの開発にも力を入れていた。

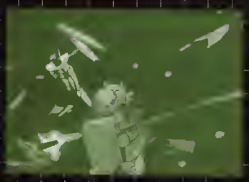
地球方面軍は軍内部でどの段階で設けられたか、正確な時期はわかっていない。もともとはジオン公国軍の地球進攻作戦を担っていたキシリア少将麾下の突撃機動軍第1機動歩兵師団を基幹とし、改編、増強されたものだと言われている。司令官にはザビ家の末子ガルマ・ザビ大佐が任命された。

以上が公国軍の基本的な構成であるが、見ての通り、これらはザビ家とその周辺の人間により統制されており、軍機構自体が書類上の物に過ぎなかったと言われる。ギレン・ザビ総帥の下に、軍事一般を統轄すべき公国軍総司令部が置かれていたが、実質機能していなかった。これより下に位置する宇宙攻撃軍のドズル・ザビ中将、突撃機動軍のキシリア・ザビ少将、いずれかの裁可なくしては、総司令部は各方面から上がってくるさまざまな提案について決定することができなかったのである。

ア・バオア・クー戦時におけるジオン公国軍の編成

概要



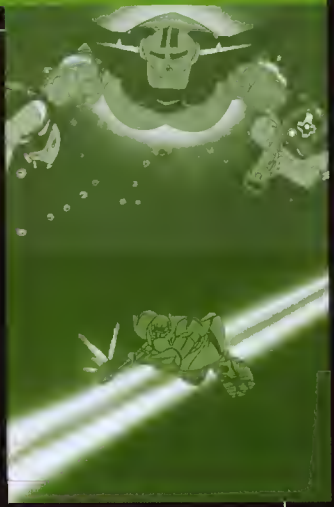


ジオン公国軍において、今まで一つの戦域に一つの指揮系統という発想は存在していなかった。それは、軍閥視がザビ家一門の独裁によって意図的にゆがめられていたからである。同一の部隊であっても、個々の戦局において命令系統に異動がある場合が多かった。しかし、ア・バオア・クー戦においてはじめて指揮系統が一本化された。地球方面軍と宇宙攻撃軍の残存部隊が、キシリア・ザビ少将麾下の突撃機動軍へ編入されることとなったのである。当時の公国軍は地球での制圧地域を失っていたため、地球方面軍が事実上崩壊していた。また、ソロモン海戦においてドズル・ザビ中将が戦死したことで、宇宙攻撃軍は指揮官を失っていたのである。

おおまかに作戦司令部、迎撃機動艦隊、基地外周守備隊、基地内守備隊という編成でア・バオア・クーの防衛にあたったと言われているが、各部隊の編入により、現場の混乱は大きく、実際にはもとの部隊名が使われていたようである。

作戦司令部

ア・バオア・クー上部のセントラルタワーにおかれ、ギレン・ザビ総帥みずからが指揮を執っていた。また、キシリア・ザビ少将もア・バオア・クー到着後、ここで各部隊に命令を出していた。ギレン・ザビ総帥が殺害されたのもこの司令部においてであり、その後はキシリア・ザビ少将が全軍の指揮権を取ることとなった。



遊撃機動艦隊

各フィールド上に防衛拠点を持たず、戦況に合わせて各所に派遣されていた部隊である。キシリア・ザビ少将の命令の下、Sフィールドに取り付きつつある連邦軍のルザル艦隊を迎撃した、シャア・アズナブル大佐のジオング、および第34モビルスーツ隊もこの突撃機動軍に属していたと考えられる。その他、多くのモビルスーツ隊や少数量産されたMA-05ビグロによるモビルアーマー隊も有していたようである。

基地外周防衛部隊

各フィールドに配置された部隊であり、連邦軍艦隊がア・バオア・クーへ進入するのを阻止する役割を担っていた。2隻のドロス級空母を守りの要とし、数で押す連邦軍艦隊の猛攻によく耐えていた。新型のMS-14ゲルググが多数配備されていたが、パイロットに学徒兵が多く、あまり効果は上げられなかったようである。

基地内守備隊

連邦軍の要塞内部進攻を防ぐため、ア・バオア・クー内部に配備された部隊。要塞内部に進入された時点で、ある意味攻略されたも同然であるせいか、配備された数はそんなに多くはなかったようである。モビルスーツ隊の他、白兵戦専門の歩兵隊も構成されていた。

ジオン公国軍投入戦力

VESSELS 艦艇

トロス級大型輸送空母　2隻

戦艦グワジンタイプ　数隻

重巡洋艦チベタイプ　数隻

機動巡洋艦サンジバル　数隻

巡洋艦ムサイタイプ　数十隻

輸送船

大型輸送艦パゾク　少数

宇宙戦闘機

戦闘爆撃機ガトル　多数

MOBILE SUITES
モビルスーツ

ザクタイプ　多数

リック・ドムタイプ　多数

ゲルググタイプ　多数

ア・バオア・クーを防衛すべく配備されたジオン公国軍の戦力は以下のようであったと言われている。戦艦4隻、空母2隻、通洋艦41隻、突撃艇46隻、モビルスーツ3600機、宇宙戦闘機830機（前述の地球連邦軍の投入戦力と同様、正確な数字かどうかはわかっていない）。

数こそソロモンの防衛で記備された艦艇とかわりはなかったか、戦力的には一年戦争中最大規模であった。MS-05ザクIといった旧型機をはじめとして、モビルアーマー、MA-05ビグロの複数機投入など、ジオン軍は総力を結集して、この戦いに臨んだのである。この戦域に投入された艦艇数は稼働可能な全艦隊の70%近い数だったと言われている。

しかし、数は多数であったが、戦力の質は劣ったものであった。これまでの戦いで多くの優秀なベテランパイロットを失っており、学徒兵に頼らざるを得ない状況だったからである。

MOBILE ARMOUR
モビルアーマー

ビグロ　数機

ジオング　1機

■■試作実験機、発展型モビルスーツの投入 ■

ジオン軍は、まさに総力戦となった一年戦争の戦いにおいて、試作機、実験機までも実戦に投入していたようである。MSN-02ジオング、MS-05Zサイコミュ・システム試験用ザク、MSN-01サイコミュ・システム高[illegible]試作機などが記録に残されている。

また、各モビルスーツの発展型も少[illegible]備されたようで、「真紅の稲妻」の異名で知[illegible]たMS-14B高機動型ゲルググや、リック・ドムを再設計したMS-09R-2リック・ドムIIもこの戦いに参加したと言われている。

column

ジオン公国軍の戦略

ソロモン海戦におけるジオン公国軍の選択

ジオン公国軍は、ソロモン海戦で致命的なミスを犯した。劣勢に立たされ、増援を要請したドズル・ザビ中将に対し、ギレン・ザビ総帥はア・バオア・クーからの提案派遣を拒んでいる。戦争の大局を決する戦いにおいて、予備戦力の温存という選択をしたのである。その結果が同海戦のジオン公国軍の敗北であった。ギレン・ザビ総帥の心中には、仮に連邦軍がソロモンを奪取してア・バオア・クーに侵攻したとしても、現存の艦隊戦力で壊滅が可能であるという判断があったのかもしれない。そのためにドズル・ザビ中将の提案要請に応じなかったともいえる。しかしながら、戦略において物量の優位は何物にも勝るものであり、ソロモン陥落はジオン公国敗北へのステップのひとつであったことは確実である。特にギレン・ザビ総帥とキシリア・ザビ少将の確執に代表されるように、ジオン公国軍内部の政治的な対立が、ソロモン海戦からア・バオア・クー攻防戦にかけてのジオン公国軍の戦略の歪みを助長したものであるといえるだろう。

ア・バオア・クーの防衛システム

ア・バオア・クーは、一年戦争当時においては連邦軍のジャブローと並んで堅固な防衛拠点であった。特筆すべきは、効率化された対空防衛システムである。ア・バオア・クーは要塞を中心として周辺をN、S、E、Wの4つの領域に区分し、その管制領域の境界線に対戦闘機、対艦用の防空兵装を配していた。これにより、どの方位からの攻撃に対しても柔軟に対応することが可能であった。特に、各管制領域の中心部は2方向に設置された対空火器からの十字砲火を受けるエリアであり(クロスポイントと呼ばれる)、実際は非常に困難であった。しかし、その火線を突破した内部領域は対空火器の手薄な領域となる。ジオン公国軍はそこに大隊規模のMS部隊を配置し、その防衛に当たらせていた。これらの防空体制によって、ア・バオア・クーは堅牢な要塞として機能していたのである。

防空システム概念図

左はア・バオア・クーを上部から見た図である。周辺の空域を同型の直方体で4つの方形に区分し、それぞれ、S、N W、Eと名付け管制区としていた。十字砲火の集中するクロスポイントを突破された場合、その内部領域は対空火器の最も手薄な部分となってしまう。

最大同火集中部分(クロスポイント)

防衛兵器射程外死角地域

ジオン公国軍が抱えていた不安要素

ア・バオア・クーの堅固な防空システムとソーラ・レイ・システムによる連邦軍艦隊への打撃によって，ジオン公国軍はア・バオア・クー攻防戦の序盤を有利に展開していた。しかしながら，その戦況には数々の不安要素を内包していた。ひとつは迎撃部隊の練度にあった。ここまでの連邦軍との戦いにおいて，ジオン公国軍は多くの熟練パイロットを失っていた。そのため，ア・バオア・クーの防衛に当たるモビルスーツ（以下MS）部隊のパイロットに，学徒動員によって徴兵された速成パイロットを充てるしかなかったのである。攻防戦の序盤はその事実を隠まえた上で，ギレン・ザビ総帥がMS部隊を運用していたため，そうした歪みが露見することはなかった。しかし，キシリア・ザビ少将に指揮権が移行してからは，MS部隊の練度の低さが顕在化し，結果ジオン公国軍の劣勢を助長することとなった。もうひとつの問題は，前述したザビ家内部の政治的対立である。ギレン・ザビ総帥とキシリア・ザビ少将は，お互いを最大の敵と見なしていた。そのため，双方ともに戦争終結後の権力闘争にまで思慮を及ばせ，それが戦略に直結していたのである。ア・バオア・クー攻防戦では，その対立が最悪の形で噴出することとなる。独断で連邦政府との和平交渉に踏み切ったデギン・ザビ公王を，ギレン・ザビ総帥がソーラ・レイ・システムによって連邦艦隊もろとも暗殺。その事実を知ったキシリア・ザビ少将がギレン・ザビ総帥を暗殺したのである。それがア・バオア・クー攻防戦の敗北とジオン公国滅亡の引金となったことは，周知の事実であろう。戦争は政治の一形態と評されることは多いが，ジオン公国の場合はそれが顕著に表れ，かつ大きく戦局を左右した例といえる。

ア・バオア・クー陥落を免れていたなら……

このようにして，ア・バオア・クー攻防戦はジオン公国軍の敗北で幕を閉じた。歴史を語る上で「if」を論じるのは意味を成さないが，もしもジオン公国軍がこの攻防戦に勝利していた場合，一年戦争の戦局はどのように変化していただろうか？　ア・バオア・クー攻防戦の時点で，ジオン公国軍は同要塞に配備されていた戦力の他にも，グラナダと本国に戦力を残していた。これらを糾合し，連邦軍主力艦隊を撃退した隙を突いてソロモンを奪還していれば，あるいは劣勢に傾いていた戦局を打破できていたかもしれない。しかしながら，先にも述べた通りザビ家は政治的な確執を抱えていた。地球連邦政府に公国の独立自治権を承認させ，一つの国として成り立ったとしても，いずれは政治的混乱によって自滅していたのではないだろうか？　旧世紀の世界大戦における枢軸国家に学ぶ通り，権力主義・全体主義の国家は滅亡の蓋き目を免れていない。転じて，ジオン公国もまた恒久的に継続することは難しかったのではなかろうか……？　いずれにせよ，ア・バオア・クー攻防戦の敗北を契機にジオン公国は滅亡し，一年戦争は集結した。歴史にとっては，その事実のみが真実であろう。

大戦末期まで使われ続けた その理由とは？

ジオン公国軍の量産モビル・スーツ（以下MS）、MS-06ザクⅡ。一年戦争の全期間を通して戦った、唯一と言っていいMSシリーズで、兵器に詳しくない人でもその名前を知っている程の"MSの代名詞"的存在である。その中でもF型と呼ばれるMS-06Fと言えば、事実上のザクのスタンダードモデルであり、実戦に投入されたザクは多くがこのタイプ、もしくはそのマイナーチェンジ・バージョンであった。

ア・バオア・クー戦の時点で、F型を中心としたザクⅡは実戦に投入されてから一年近くを経過していたものの、終戦間際のU.C.0079年末においても第一線で使用され続けていた。戦争中における一年とは兵器が陳腐化するには充分な時間であり、実際ザクⅡを後発のリック・ドムやゲルググと比較した場合、装甲や火力、推進力など多くの面で見劣りするのは否めない。それでもザクⅡが運用されていたのには、相応の理由があったと考えられる。

理由のひとつは数量的な問題であると推測されている。つまり、「ザクを使いたかった」のではなく、「リニしかなかった」ということだ。

ザクⅡの後継の主力MSとして期待された、MS-14ゲルググ。そのゲルググの実戦投入が確認されたのはU.C.0079年12月下旬である（先行生産型と思われる機体が12月初旬に登場したとも言われるが未確認）。ゲルググ量産までの代替機とも考えられるMS-09Rリック・ドムも、11月下旬～12月初旬に出現が確認されているに過ぎない。つまり、両機が配備されてからア・バオア・クー戦までの期間が短かったため、12月31日の時点でのゲルググの配備数は極めて少なく、リック・ドムも定数に達していなかったと推測できるのだ。このように、新型機だけではMSの定数は揃えられなかっただろうから、その穴は以前から量産されていたザクⅡで埋める以外に方法はなかったのではないか。実際、最終決戦時のア・バオア・クーではザクⅡどころか、第一線から外されていたMS-05ザクⅠや、実撃艇ジッコ、戦闘機ガルバルでもゲルググと肩を並べて配備されており、ロールアウトし始めていたザクⅡの大量投入も当然のことだったろう。

では、ザクⅡは定数を揃えるためだけに配備された"員数合わせ"だったのか？　確かにザクⅡはカタログスペックでは後発機に及ばないが、数値に表れない部分にこそ一年戦争を戦い抜いたザクⅡというMSの真価がある。それが、大戦末期を迎えてもザクⅡが現役であった理由の一端ではないか。

数値に表れないザクの真価。それは、ザクⅡが一年戦争を通して使われ続けてきた、当時最も"こなれた"機体であった――換言するなら、信頼性の高いMSであったと言うことに尽きるであろう。ザクⅡは一年戦争開戦の時点で実戦に投入されたMSであり、実戦データの蓄積による機体改良というハードウェア面での充実、パイロットの機体に対する慣熟と言うソフトウェア面での強化がなされており、これらの要素こそが兵器の必須項目である信頼性につながっていたようである。

ハードウェア面では、汎用機として完成度が高いF型や、総合性能向上型のF2型、他系列MSとの機種系統一を目指した統合整備計画に則って設計されたFZ型の開発などの直接的なパワーアップが注目されがちであるが、ザクⅡの強みはそれだけではない。ザクⅡのハードウェア面での信頼性を支えていた中核要素は、ジオン公国軍最多と言われる生産数そのものと、それにともなう予備パーツのストックに集約されると考えても差し支えないだろう。どんなに強力な兵器であっても、稼動しなければ無用の長物である。ザクⅡは、その点を開戦以来の度重なるマイナーチェンジと生産数で補い、高い信頼性を得ていたと言えよう。

ザクⅡの信頼性を担うもう一方のファクター、ソフトウェア＝パイロットとMSの関係であろう。ア・バオア・クー戦までに多くの将兵を失っていたジオンであったが、それでもベテランと呼ばれるMSパイロットたちを残していた。彼等の多くは一年戦争初期からの猛者で、主力MSザク・シリーズに慣熟しており、他のMSよりもザクを好んでいたと考えられる。これは、単なる懐古主義やロマンチシズムではなく、ザク系MSの特徴に挙げられる「良好な操縦性」に関するところが大きいようである（これは、新兵でも比較的容易に扱えるということであり、大戦末までザクⅡが使われた理由のひとつでもある）。

では、ベテラン・パイロットたちは新型機への機種転換を思ったのかと言えば、そうではない。レビル将軍の"ジオンに兵なし"発言に見られるように、一週間戦争やルウム戦役で兵力を損耗していたジオンは、その後の戦争を遂行する上でベテランたちに負担をかけざるを得ない状況にあったように見受けられる。そうなるとベテランたちは多くを極め、後方で機種転換訓練を受ける時間も制限されてしまっただろう。実際ア・バオア・クー

Mobile Suit column 01

MS-06F ZAKUII

モビルスーツコラム　MS-06F　ザクII

戦では、最新鋭機ゲルググのパイロットの多くは学徒兵で占められており、ほとんどのベテランや中堅パイロットにはリック・ドムやザクⅡが回されていたようだ。もっともア・バオア・クー戦の時点で、ベテラン兵に優先的にゲルググを与えたとしても戦争の帰趨には何ら影響はなかったと思われるが……。

一年戦争の緒戦で、連邦を降伏に追い込めなかった時点で、早期決戦を目指したジオン軍の目論みは崩れていた上、その後の戦略を誤ったためジオンは劣勢に陥った。前述の通りザクⅡは確かに優れたMSであるが、数に勝る連邦軍が量産MS・RGM-79ジムを配備した時点で、ジオン軍は戦術/戦略上のアドバンテージを喪失していたのである。上層部の失敗は常に前線に反映される。そのツケを払わされたのがザクだったのかもしれない。

COLUMN 01

MS-06F　ザクII
（ザクバズーカ装備、中隊長用ヘッド、ヒートホーク付属）

MS of MS
モビルスーツの代名詞、ザクⅡ

ア・バオア・クーで活躍したモビルスーツを取り上げる、ガンダムオペレーション・フィギュアコレクション・第一弾は、MS-06FザクⅡである。

一年戦争時に活躍したモビルスーツは数多くあれど、最も印象に残る名機として脳裏に挙げられるのは、やはり、ザクⅡであろう。ある意味、すべてのモビルスーツの原点であり、モビルスーツ＝ザクⅡという認識を持つ人も少なくないはずである。前ページでも振られている、[illegible]からア・バオア・クー戦に至るまで使われ続け、絶対的性能だけでは計れない魅力を持つ、人気の高い機体だ。

今号の付属フィギュアは、そんなモビルスーツの代名詞、ザクⅡをリアルに再現。1/220というスケールながら、足裏やシールド裏面はもちろん、膝当ての裏側といった通常なら省略されてしまうような部位にまで、細かいモールドを施している。

Figure "MS-06F ZAKUII" Manual
付属フィギュア解説　MS-06F　ザクII

遊べる要素が満載
自分なりの楽しみ方で

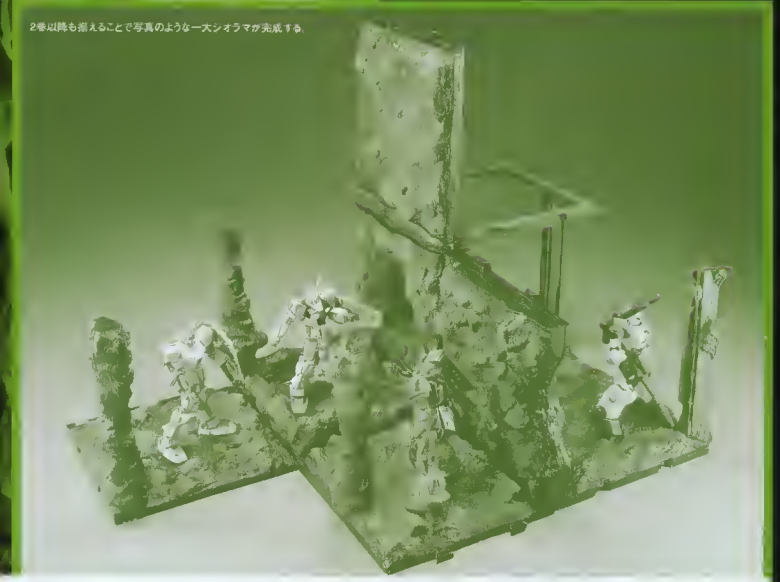
両肩と両股の4カ所にボールジョイントを採用し、大きなポージングを取ることができる。また、頭部を動かすことで、モノアイの可動を表現。隊長機ヘッドとヒートホークも付属し、様々な場面の再現が可能だ。

彩色はグラデーションを活かし、スケール感を演出。表面をマットに仕上げ、リアリティを出すと同時に、成形上のパーティングラインを目立たなくしている。

ジオラマベースは複数組み合わせて、下の写真のように巨大なジオラマを作ることが可能。また、付属パーツの透明成形の支柱を使用することで、モビルスーツが空間に浮いている状態も表現できる。

以上のように多くの"遊べる要素"を盛り込んだこのフィギュア・コレクション。たくさん集めるもよし、改造するもよし、自分なりの楽しみ方を見つけて欲しい。今後このコーナーでも、簡単なカスタマイズ例などを紹介していくつもりである。

2個以降も揃えることで写真のような一大ジオラマが完成する。



TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポートvol.1 ―戦術・戦略編―

C O N T E N T S

ア・バオア・クーとは ― 2

ア・バオア・クー戦概略 4

ア・バオア・クー戦闘の推移 12

地球連邦軍の戦力・戦略 22
地球連邦軍の組織編成 23
ア・バオア・クー戦時における地球連邦軍の編成 24
地球連邦軍投入戦力 26
地球連邦軍の戦略 28

ジオン公国軍の戦力・戦略 30
ジオン公国軍の組織編成 31
ア・バオア・クー戦におけるジオン公国軍の編成 32
ジオン公国軍投入戦力 34
ジオン公国軍の戦略 36

モビルスーツコラム ―MS-06F ザクII ― 38

付属フィギュア解説 40

次号予告 43

2003年12月25日発行　トイブックコレクションシリーズ　ガンダムオペレーション　ア・バオア・クーvol.0001
価格◎1200円(本体1143円)　発行人◎小松崎孝一　編集人◎猪俣順次　企画・編集◎株式会社セイカ トイブック事業部
発行・発売◎株式会社セイカ　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-8　栄泉岩本町ビル　電話◎03-5820-3745(編集)
トイブックホームページアドレス◎http://www.toybook.jp　印刷所◎図書印刷株式会社
トイ　製作管理　内山博之　ブック　執筆◎坂口徹仁、杉山和繁　エディトリアルデザイン◎有限会社ロケットパンチ　CGイラスト◎友杉通也
アドバイザー◎岡崎昭行　撮影◎スタジオアール、中村浩　撮影協力◎月刊ホビージャパン パッケージデザイン◎神田美智子(ブレインナビ)
編集協力◎杉原克由、大矢直人(ブレインナビ)　監修：株式会社サンライズ

●本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部、あるいは全部について株式会社セイカトイブック事業部の承諾を無しに、いかなる方法によっても無断で複写、複製することは禁じられています。●乱丁本、落丁本、梱包時における欠品及び破損は、小社品質管理室(03-5820-3743)までお送り下さい。送料弊社負担にてお取替えいたします。◎創通エージェンシー・サンライズ

ISBN 4-9023-9900-8 Printed in Japan, Made in China

NEXT ISSUE 次号予告

Vol.0002

GUNDAM OPERATION
A・BAOA・QU

TOY

コレクションフィギュア2
RX-78-2　ガンダム
ビームライフル装備、
ビームサーベル、
ガンダムシールド付属

専用ジオラマベース

BOOK ア・バオア・クーレポートvol.0002 ―地球連邦軍兵器編

地球連邦軍モビルスーツ・戦艦解説、ア・バオア・クーにおけるモビルスーツ運用、etc

2004年1月25日発売予定

GUNDAM
OPERATION
A BAOA QU
ア・バオア・クー レポート
VOLUME
0001
戦術・戦略編